

りかつくものでない。だから一家の治まりを付けるには、どうしても、こうでなければならぬ。のみならずこうなると一方から見れば反つて女の方がエライのかも知れぬ。男は始終外に出で、働く女は内に居て参謀になるといふのだから、言は、男が女の手先さとなつて働く様なものである。

これで以て見るも、女といふものはどうしても學問がなくてはいかぬ。夫が家に歸つて相談をする、すると女は夫に向つて或る知慧を授けねばならぬのだから、無論男ほど専門的に深い學問といふのではないが寧ろ、廣い關係に於て夫の職業に關する智識といふものを、十分持つて居らなければならぬ。

そこで女子教育といふものも、大体右の様な方針で進んで、到底は男子と同等の程度まで進めん

ければならぬ。勿論今日まで甚だ低い程度に在るものを今俄に高くするといふ譯には行かぬ。併し漸次と其歩を進めて行くべきものだと思へる。

上は過般嘉納先生が記者に語られたる意見の主要なり。校合を經たるにあらざるを以て、文字の誤は筆者の責さ知られ

ニユーイングランド

の一家庭

松本亦太郎

一とつぶの種子が地に落ちると芽が出る、其芽が段々成長して松や杉のやうな棟梁の材になるかならぬかは、其種子の中に具有されて居つた本來の性質と、其種子が落ちた處の外圍の境遇即ち土地の肥瘠、日光の流通、空氣の否良、水分の多少により定まつて來るのである。一の家庭が

社會に出来る有様は、丁度種子が地に落ちたやうなもので、其家庭が善美なる家庭になるかならないかは、第一に其家庭を捨らへる人々の本來の性質如何により、第二に其家庭の存在する土地の有様及社會の狀況如何により定まつて來るので、家庭と社會と相互働き合ふ所から、家庭の幸福なる生命が湧き出て來るのである、それであるから一の家庭を観察しやうとすれば、勢い是等の點を探つて見ねはならぬ、併し人間の性質、社會の狀況といふやうなものは突如として湧き出るものではない、夫々相當の來歴があつて形成するものであるから、溯つて此來歴を尋ねる事も亦必要である」

自分が茲に語らうと思ふ家庭は、是は架空の家庭でも無ければ、理想の家庭でも無い、曾て海外に流浪して居つた項に偶々目撃したる家庭であつ

て、而かも其家庭の中に自分も一年許り住んで居つた事があるのである、其家庭はニューヨークラッパに在つたのであるが、ニューヨークラッパと云ふのは北米合衆國の東岸で、大西洋に面して居る北の方の狭い一帯の土地を指して云ふのである。一合衆國の人民は諸國民入り交りであつて、今日では凡そ世界中の重なる國民で合衆國に住んで居らない國民は殆んど無と云ふつてよい位である。處々方々の國民が斯の如く合衆國に這入り込んで來た目的は種々雑多である、或は領土を廣むる爲めに此國に來たものがある西班牙人の如きは即ちそれである、或は佛蘭西人の如く、此國のまだ手の付けない豊饒なる土地を耕やさうと云ふ考で入り込んで來たものもある、或は新開國に商賣をして一攫千萬金を得やうと云ふ積りて遣つて來た

のもある、和蘭陀人の如きは即ちそれでゐる、又近來になつて 亞米利加の垢を洗ひ落とし、其垢水を變して黄金に化さうと云ふ考で、至る所に洗濯屋を開いて居る支那人の如きもある、さう云ふ次第でどれもこれもなかく欲張つた目的でもつて、此新開國に入り込んで来て居るのであるが、茲に夫等と全く異つた、一種妙な目的を有つて此新世界に移つて來た國民がある、夫れは即ちイングラントから來た國民である。

英國といへば今日では歐州諸國のうちで文明の理想に最も近く達した先進國で、其國躰から云つても最も立憲的で、政治宗教の自由などに於て歐州諸國中英國の右に出づる國は無いと云つてよい位である。處が十七世紀の初頃の英國と云ふものは壓制暴逆の輓の下に苦んで居つたので、政治及

良心の自由と云ふものは固より剝奪されて居つて人權なるものは暴君主の足下に蹂躪されて居つたのである、敢て時世の非なるを慷慨し、政治宗教の自由を得んが爲に力を致す者の如きは、之を囹圄に繋ぎ、之を首刎ると云ふ有様であつたから、志ある人の中には英國に住むのを危うしとし、和蘭陀あたりに亡命の客となつて一時身を潜めて居つたものもあつた。夫等亡命客中に人は己が良心の命するところに從て直接に神を崇拜する權利を有つて居る法王とか監督とか云ふものに指命を待つに及はんと云ふ事を主張した爲めに英國より放逐された一連があつて、其人々はロットルンダム及ライデンあたりに住んで居つたが、星霜推移るに從ひ英王の壓制は益募り、いつまでたてば本國に歸る事が出來ると云ふ見込はなし、然りとて

永く他國に流寓するも是といふ望もなしと云ふ處から、此一連の人々は、大に茲で奮發蹶起し、其住み慣れたる舊世界を棄て、遙々大洋を越えて、舊慣故格なく、人跡さへ稀なる清淨潔白の新天地に移り心の靈明を切磋琢磨し不羈獨立なる自由の生涯を送らんと志を立てたのである。

北歐と北米とは三千數百海里ある、今日では汽船の來往が頻繁で、急行の船ならば六日間で太平洋を渡る事が出来る、併し太平洋に比らべると波濤は餘程荒い、メキシコ灣から北氷洋の方に流れる潮流があつて其潮流の範圍内に於ては随分暴風雨に逢ふ事が多い、自分は三度はかり太平洋を渡つた事があるが一萬五千噸位の汽船に乗つて居つても毎も、二三日間は随分動搖が甚だしくつて怒濤甲板を拂ふ事が度々であつた、彼の亡命客の

一群が此大西洋を渡つたのは、西曆千六百二十年頃であつて勿論漁船の便などはない、メイフラワ―と名くる僅か百八十噸の木船に四十一人の移民と其家族が乗組んで漂然此大洋に浮んだのである。我に自由を與へよ否らば死を與へよと云ふのが他日北米國民が獨立戰爭をなす時の警語であつたが、夫れは即ち此メイフラワ―の一群の男女の精神であつたのである。三軍の帥は奪ふ事が出来ても匹夫匹婦の志はなかく奪ふ事が出来ない。此メイフラワ―の一群は風濤の難と戰つて長日月の後遂に大西洋の彼岸に達したのである。

一昧アングローサクソン人と云ふは、極めて粘り強い性質を有つて居る人種で、一寸見ればグズグズして居る様であるが、困難に逢ふと益不屈不撓の精神を喚び起こして、盤根錯節に逢ふ毎に

愈其心の銳利なる所が現れて來る人種である。

斯の如き人種であから、メイフラワ一の一群は新世界に上陸しても他の移住民の如く氣候の温和なる所や、土地の豊饒なる所に住んで安樂の生涯を送らうとは希はない、却て寒氣の甚しい、土地は山澤で荒れ果て居る太平洋東北岸の一帶の地を撰び、之をニューイングランドと名け已等の住み場處と定めたのである。づつと北の方であるから一年の内氷雪の時節が長い、沼澤が多いから瘴癘の氣に犯され病に罹るものが多い、不毛の土地であるから饑飢に苦しむ、明日の食物をどうして得たら善からうと思ひ煩ひつゝ、眠に就いた夜も數々あつたと云ふ事である。

此一群の男女がニューイングランの開拓に勞働して居る間に、本國の状態は如何になつたかと云

ふと、チャールス王の專横は益々甚しくなつて議會は數々解散せられ憲法も宗教の自由も滅茶くんに蹂躪され、天日爲めに暗しと云ふ様な次第になつて來たのである、此暗黒時世に一條の光明となり、人意を強うしたのは彼のメイフラワ一群众男女の志であつた。この一群が自由の天地に移り新英國を建立しつゝ、あると云ふ風説が段々英國に傳つて來たものだから、夫れに勵まされて志ある者は我も〜と新世界移住を企て、續々隊を組み大洋を越えてニューイングランドの土地に渡つて來た。是等の移住民は曩に來つたメイフラワ一の一群の如く貪しいものではなかつた、其大部分は社會の中流以上に位する敢爲の有業者で、なかには大地主、財産家もあり、熱心なる宗教家、ロンドンで腕利きの法律家などもあつて、オクス

フオールド大學出身の有爲なる青年學者も混して居つたのである。是等の人々は地上の俗慾を満たさんが爲めに來りたるにあらざり或は冒險的好奇心に驅られて來りたるにもあらず、只管良心の獨立を得て信教の自由を全うし飽まで眞理を探索し且つ之を實行せんが爲めに其祖國を去つて此新開の土に來つたのである。此新開國に移つて來た他國人中には無頼漢、山師、犯罪人、及本國に於て身代限などをした者が多かつたので、とう云ふ人間のそこゝに徘徊して居るなかには是等英國人の一群が來たのは恰も萬綠叢中に一點の紅花咲ける如き有様があつたのである。他日自由平等の爲めに英國の暴政府と戦ひ或は奴隸制度廢止の爲め、南部諸州と戦ふが如き、人道の大義を明にする大運動は多く此ニエーイングランドが中堅になつて始ま

つたのである。

英國からの移民がニューイングランドに土着するや、衣食住の具、未だ備はらざるに當て、夙に企てたる事業がある、彼等は勤勞の効により得たる僅かの収獲中より幾分つゝの貯をなし、之を以て學校を興し、教會を建て始めたのである、一身を犠牲にして世の中の爲めに働く自主獨立の人物を養成すると、宇宙の大道を探究尊崇するとの二つが是等の學校教會の目的であつたのである。ハワード及エール兩大學の如きはあらゆる方面に於て北米合衆國の柱石になる人物を續々輩出せしめて居るが此兩大學は實に此困難の最中に産まれ出でたので、ニューイングランド移民の熱血が其源泉になつて居る。斯て世の變遷に従て此移民の創立したる學校及教會は、漸次發達してニュ

ーイングランド人を陶冶したから、ニューイングランドには一種の氣風が養成されて、至て品位の高い、敢爲の氣象に富んで居つて、而かも溫良の徳を備へて居る人物が、澤山に出来るやうになつたのである。

英語に「ミスター」と云ふ言葉がある、男子を呼ぶ時に用うる敬稱であつて誰サンとか、誰君とか云ふ様な意味の言葉で誰に對しても之を用うる事が出来る。新聞記者が己の國の宰相や大統領の事を書く時「ミスター、グラッドストーンガ云々、或はミスター、マッキンレーガ云々と書く、少しもおかしくないのみならず、ミスター某と呼はるゝ時は呼ばれたものは大層自分が尊敬されたと云ふ様な感じが起る。日本の新聞記者が若し其紙上に改まつて書く場合に、桂君が昨日議會で云々とか、伊藤サ

ンが露西亞で云々とか云ふ様な風に書いたらは少しおかしく聞こへる、矢張り眞地面な場合には桂總理がどうか、伊藤侯爵とか云ふ言葉を用ゐねばならぬ、朋友知己の間に普通に用ゐられて居るサンとか君とか云ふ語を用ゐては、伊藤侯爵桂總理を十分に尊敬する事にならぬのである、君とかサンとか云ふ言葉よりも侯爵とか總理とか云ふ肩書の方が尊い様に人々は感するのであらう。英語ではさうでない普通人に對して用うる「ミスター」と云ふ語が、動もすると總理とか大統領とか云ふ肩書よりも尊く感ぜらるゝので、時によると「ミスター大統領ガ云々、ミスター議長云々などと云ふ様に、肩書の上に「ミスター」を加へねば失禮に當る事がある、ミスターと云ふ語が其様に尊い意味を有つて居るのはどう云ふ譯であるかと尋ねると、ミスタ

一と云ふ語にはゼンツルマンと云ふ意味があるからである。語原に斯ふ云ふ意味がある譯ではないが、實際に於てゼンツルマンと云ふ者がミスターと云ふ語に含まれる様になつたのである。ゼンツルマンは立派に品格の具はつて居る君子の人となりと云ふ様な事を顯はす語である。それであるからミスター誰々と呼ぶのはゼンツルマン誰々と云ふのと同じで、君子の人と成りと云ふ資格は人間の天爵であつて、大臣とか大統領とか云ふ様な一時限りの人爵と比べるゝと遙に尊い、道德的に貴い價値があるから、ミスターと云ふ稱號が英語界に於て頗る重きをなすに至つたのである。此が此ミスターと云ふ語を他國の語に譯するのが六ヶ敷い、君と譯してもサンと譯しても當らない、士でもマヅイ、獨逸語のヘル、佛語のモシエー、以

太利語のシニョーレ孰れも恰當しない、是れは國々により理想が違ふからである。例へば日本では昔は、人は武士と云つて理想的男子は士であつたそれだから男子を尊稱するに『との』と云ふ語を用ゐた、とのと云ふは士の住んで居る家とか屋敷とか云ふ様な意味であらう。其如く獨逸の理想的男子はヘルと云ふ語でよく顯はす事が出来る、處が英國の理想的男子はゼンツルマンである、ゼンツルマンは英國が本場で、他國では見る事が稀れである標式を具へて居るゼンツルマンを英國に於て見る事が出来る、ケンブリッヂ、オクスオールド兩大學の如きは此ゼンツルマンの養成所である、其ケンブリッヂやオクスオールドから系統を引いて居るハーワート、エール兩大學は又新英國に於けるゼンツルマン養成所になつたのである。さうい



ふ次第であるから頗る立派なるゼンツルマンの標式を具へて居る人物は世界の内で北太平洋の兩岸に相對して居るオールド、イングランとニエー、イングランの兩所に於て最も多く之を見る事が出来るのである。此ゼンツルマンは一面から見ると極めてホーム的の性質を具へて居る、善美なる家庭の成立つには此ゼンツルマンが一の主要素になる事が必要である、(續く)

娛樂の選擇

佐方鎮子

凡そ生きたし生けるもの何者か楽しみながら、山を走る獸、空を翔る鳥、もしくは水に住む魚の類に至るまで各々其の生活の狀態と食餌の種類とに應じて之を満足せしむる傍、樂む處なくんば

らず。さればこそ花にたはふれ月に謠ひて、優に其の天然の性情を遂くるとを得るなれ。心なき禽獸蟲魚にして已に然り、況んや天地秀靈の氣を受けて靈智靈能を有せる吾人々類をや。故に富貴に生れて高樓大廈に住み、綾羅を着錦繡を茵とするあたりは勿論、風雨寒暑を厭ふのいとまなく齷齪として其の務に従事する類より、僅に茅屋に住して雨露を凌ぎ、終日勞働に服して一杯の飯一壺の酒を得る輩に至るまで、皆それく樂む處あり、以て艱難をも辭せず、勞苦をも厭はず、各々其の分に應じたる業務に従事し、或は神心を惱まし、或は筋骨を勞し營々として倦むことなく、以て其の老年に趣くを知らざるに至るなり。若しそれ毫も樂む處なく、望む處なくんば何を以て身を勞し心を苦めて其の業を營む者あらんや。故に絶望の